

三河 アララギ

2019年10月 神無月 かみなづき

十 月 号

第 六 十 六 卷 第 十 号



ニューヨーク日記(156) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

THE KYOTO EXPERIENCE
Blue Shoe Diaries



京都は日本人であっても何時も何か特別な感じがしない? 今回の京都はその上貴重な体験付きでした! 祇園一のお茶屋さんで舞妓さんや芸妓さんとお喋りしたですよ~舞観賞も素敵~本当の京都の世界を少し見せてもらいました。もちろん美味しい京都も! 京都、祇園は特に、行くと夢でタイムスリップしたかのような気になって次の朝起きる感じがするなあ。

Visiting Kyoto is always special, even for Japanese people. This time around it was extra special because we got to experience an evening at the most prestigious tea house! Seeing the maiko-sans and geiko-sans' dance performance, chatting with them over sake, and even enjoying a meal at a classic Kyoto restaurant. It was all surreal as you feel like you're transported in time and place that when you wake up the next morning, you're not sure if it was all a dream.

60

アカンサスの徑

御 津 磯 夫

執着もひとつみづからのいのちにて怠りすぎしも悔^{くや}みとはせず

かへり見る何かあらむやながらへてただ公害をなさぬ用心

火の用心心病の用心を父いひきその用心まごころとする

黄素馨の門いでゆきて面はゆく今日受くるものをおろそかにすな

あかときのくらやみをすぐるひと雨の音をあやしむゆとりかへれよ

生きてゐるいのちのきはみひとときも足踏みするをわれは許さず

椎や楠や昏きは岬の船山かわれに鳴きしめす朝の鳥のこゑ

心してすぎゆく窓に補陀落^{ふだらく}の御山も見えず襲ひふる雨

さまざまの死を診つつきてみづからの終るべき日のまちかき思ひ

椿の葉を蝕^くひつくしたる毛蟲らはいづこに移りゆきたるならむ

ははぎくさⅡ

大須賀寿恵

黒人の阿礼の埼のうた碑に巧し太々し御津先生の書は

原紙切りつつ眠りたるらし事務室の電燈を皆つけしまま

肋とりて傾ける吾が右肩よりシオルダーバックは幾度もずり落つ

ころげ落ちて児童の死にし開水路未だに柵も立札もなし

危険個所見つつ開水路に添ひてゆく馬鈴薯咲き盛る上細谷より

イデオイはドイツ語なりなど調べゐつあてなき学問吾は楽しむ

優良校審査要項の部厚きを読み続けゆく頸叩きつつ

新しく嵌めかへし網戸透しくる朝の風に黄の薔薇匂ふ

保育園長待たせおきたる応接室に黒の揚羽が舞ひ込みてゐし

函館に一人旅する吾娘のため海苔の太巻き三本作る

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

竝び立つ雌松の幹の傾けり拝所の砂にただわが二人

森々として天たらす鏡の山老いて来りぬ二人はつひに

夜顔の終りのつぼみ一つあり古備前といふ鶴首に挿す

よろこびを言ひて厨の隅に置くときじく非時重し冬の冬瓜

引馬野を見て下さると先生はかばんに草鞋を携へましき
昭和十六年十月二十一日

よろこばれ貰ひゆかむと言ひましき紅茶に添へし角砂糖いくつ

時雨の中めぐりたまひし先生に引馬野御馬の活きの黒鯛

水馴れして輝くばかりの御影石見つけ給ひぬ赤石山に

赤石山十里歩きて碑いしふみの石を採しし君がみこころ

碑の基礎は成りたり黄天瓜きからすうり連り生れる槇垣の下に

はゝぎくさII

河原静誠

六角の石に刻める六地藏珠持たすあり杖つきいますあり

行者路に履ひかぶさる羊歯を分けたどり着きたる塔の峰山

役小角が拓きしと伝ふ行者道断ち切りて広し東名道路

父とともにあるがごとくにおもひつつ形見の樂に薄茶を立てる

御師僧と枯柴刈りし裏山ぞ清水掬ひしこの谷川ぞ

「幸水」と書きし小さき紙片添へて友のたまひし梨の実一つ

引馬野も阿礼の埼も吾が町と証しせる石文いまここに建つ

産土の宮の古石くみかさね引馬野の碑を村人は建つ

引馬野の神の宮居の片隅にわずかに萩の一むらそよく

雨の日の保育には白秋の「雨」の唄うたひうたひて一日すぎぬ

ゆく夏の風

蒲郡 岡本八千代

くれなゐの百日紅サルスベリの花ゆれゆれて吹きくるけふのゆく夏の風

「氷魚」の稿昨日きのふに出してなとなし明るき私わたしに気づきつつゐて

ゆく夏の風は北より吹き来たりそして南へとわが部屋通りつつ

やや強きゆく夏の風吹きくる中君の御骨をけふ斂おさめむとす

いつか言ひし遺言の如き君のことは「形原の墓へ二欠片ふたかけらほど」

形原の墓には君の大切な父母おぢはおは在す墓なればこそ

われよりも君は一足先ひとあしに逝きつ君が言ひゐしとほりに従がふ

斂^{おさ}めたるあなたの墓の静かさよ夕暮れどきのわれらのみの声

君は君われは吾とは思はざりわが家の墓へも君を斂^{おさ}むる

五輪塔の右側の墓に君を斂^{おさ}めむじきじきわれもここぞと決めつつ

東京の曾孫^{ひいまご}らも帰りたりやうやう独りになりたるうれしさ

何もかも夏ゆく風の吹くままよ我もやうやくしみじみとして

わが籠^{こも}る独りの部屋の静かさよ此の部屋にして我のあるかな

運命の流れゆくままに従ひて活^{くら}さむとすよ噫^{あゐ}不可思議光

たまたまに電話の中の友の声いつまでか続くわれら独りぼっち

黙祷す

豊川 弓谷 久子

例年より遅き梅雨明け列島は猛暑酷暑の日の続きをり

北海道も猛暑とニュースは伝えをり熱中症にて死ぬ人ありと

年に一度の定期検診身長も体重も腹廻りも計られいたり

今日の暑さ話題にしつつ手際よし看護師さんは採血しつつ

サイレンに合わせて今年も黙祷す八月七日あの空爆の日ぞ

空爆に斃れし二千五百人余豊川海軍工廠を憶う

戦争のむごさ知らねば戦争をと軽く言ひたり若き議員は

盆前にとの願い叶いて移り来し姉の家なり今日より我が家

又腰を痛めて動けずすべて子等にまかせてベットに横たはりをり

猫の手も借りたき時に不甲斐無し立つも坐るも子の手を借りる

夜明けとともに油蝉啼き出す隣家の高き庭木の梢あたりか

違和感も無く暮しをり昔より馴れ親しみし姉の家なれば

法師蝉が今日は真近く啼きたつるかすかに感じる秋の気配を

降れば豪雨の今年の雨よ水害のニュース聞きつつ心いためり

京都仙太郎のすはま樂しむ子の点てし冷たき抹茶の一品に

祇園にて

東京 今泉 由利

京都花見小路に降る雨は蛇の目傘をさしてゆくゆく

台風の余波の雨の水たまり下ろしたばかりの草履ぞうりを履はゐて

身み嗜だいみ確しかと整ととのひ今は叶かなふ暖簾のれんを分わける一カ亭

言葉には現はし得ない赤にして赤壁の内静静とゆく

「福無彊」鉄斎揮毫の前にして舞妓さんと舞妓さんと舞を舞ひ舞ふ

可愛いさとあどけなさみやびと雅やかさと舞妓さんと居るひとときを

人間の本质であり原点であり花街礼儀作法の夜を

一盃は二盃三盃四盃とあのことこのこと芸妓さんと

元禄より続ける一力亭にして今日のひと夜は私に仕舞ふ

気配りはどこどこまでも行き届き格調といふ安らぎに居る

日本を描^{えが}かむとして舞妓さん6B鉛筆クロッキー画

舞妓さんの白塗りのごと描きゆく下唇に紅引き完成

高台寺裏山墓所へ登りゆく菰翁貫名先生の墓

幕末の三筆とふ祖のありてニューヨークの子等を誘^{いざな}ふ

東山三十六峰の稜線と平行にゐる今日の宿りは

油 蟬

豊川 安 藤 和 代

猛暑中千日紅の花ゆれて母の忌日のまた巡り来ぬ

「庭に草はやすな」と言いし母逝きて四十五年よ心が痛む

蒔きし種はえず蒔かざり草は雨の中にもたくましく伸ぶ

「雑草のように」のことば知りつつもまねなど出来ぬ強くはなれぬ

襖かえ畳も替えて新盆の夫待つ部屋よ蛙遠なく

袋から透けし梨の実昨日今日ふくらみ増して梅雨明けとなる

夢もよし眠れぬもよし真夜の静寂が歌を生みゆく

風に揺るコスモスに二ひき蠅の身をまかせて酷暑真昼間

庭木々の少なくなりし町内のブロック塀に鳴く油蟬

七十五才赤いサンダルもとめたり幼子のごと晴れの日を待つ

葉の裏にひこひこひこと白き腹みせて暑きを耐える蛙よ

猛暑ゆえ鳥も蟬すら鳴かぬ昼松葉ボタンの紅の輝き

主婦業

春日井 清澤 範子

令和元年台風十号の発生に三日の間テレビの報道

白山町は堤防あれど被害なく橋流される事もなかりき

フキン洗ひガスの元栓ギュツとしめ吾が主婦業に最善を尽す

シルバーカーを娘運転の車に乗せスーパー巡りてをりぬ

吾が歌を三河アラragiに掲載していただくことを誇りに思ひぬ

美容院にて耳出しカットしさっぱりとまだまだ黒髪残りてをりぬ

梅雨明けニュースあるも台風近づきて蒸し暑き日の続きてをりぬ

公園の藤棚の蔓よく繁りシルバーカーと暫し休みぬ

夕立ちは大粒の雨と風吹きて鯉のぼりの如くカーテンゆらぐ

血圧を日に三回計るなり家族三人共に高し

シルバーカーいつもの道を歩みをり公園の芝刈り草の匂ふ中

気がかり

大阪 伊藤 忠 男

飛行機に乘らずヨットで大西洋迫るを知らず温暖化危機

田舎より小包届く梨の箱今年も無事に夏を乗り切る

悪法も法は法なり大義として犯さず守るが道理ならずや

花を愛で小鳥囀ずる里山で暮らす日々こそ待ち望む夢

世の中に役立つ否や我が仕事生ある内に答え出ぬのか

算数に国語に英語理科社会小6孫の教科書に泣く

日に日にと知識学力増すを見てまだ見ぬ苦勞思いやるなり

時経てば正否自ずと明らかにそれが歴史と言うものなるに

本州の南の端の串本の橋杭岩に波砕け散る

不祥事も笑いのネタに大阪のたくまし姿健在なりや

無言館

東京 矢崎直人

この平和続けていかむ原爆忌鉄の語りし記憶忘るな

八回目共に富士山登り来し登山靴にも別れを告げん

塩田町いくさの記憶かいたるところ消火栓やら貯水槽やら

上田富士真空の下トラクター朝涼の風軽々駆ける

老鶯と蟬競い鳴き筆の囁く「無言館」には

「自問坂」何しにここへ来たのかと問い返えされる二本の足は

自由とは「檜の俳句館」格子越し己の言葉のいと軽きこと

外国の若き兵士もいたことよオリーブの読書館にて

保身より国体護持へ潔よし満員映画「東京裁判」

テレビみてとうもろこしの一粒を手にはぐして味わふ幸せ

残暑見舞

東京 森岡陽子

あと一駄席をどうぞと譲られる男児の優しさためらう私

梅雨明けて蝉の鳴き声賑やかにギラギラの夏氷屋の旗

猛暑時赤い実二粒万両の私は見付けた雀と一緒に

金銀銅オリンピックのメダル輝く都庁の展示に兎の目も輝く

栄光の記録を残すヒーローのデ IPP は突然天国へ昇る

宙を舞いデ IPP は跳んだと騎手は言う青芝駆ける無敗で三冠

早々と立秋迎ふ八月八日猛暑の中の残暑御見舞

潮入り池川鵜青鷺鴨の群円陣組みで動かず動かず

咲き満つる今日の木槿の花の華も明日は儚く散りゆくことよ

若狭路

豊川 白井 信昭

隣れるをみな切り払われ梅畑貸駐車場と変わりゆくらし

隣畑梅の幾本根を引き抜くエンジンの音わが家に響く

炎暑続く工事現場の給水車水を撒きてはシヨベルで平す

ローラー車行きつ戻りつ平しゆく地面の振動直に伝わり来

我と妻まだ見ぬ処と若狭路ゆく今日のバスツアー気になる天気

トンネルを幾つぬけきて高速道今し視界に若狭湾みゆ

水月湖すいげつこ菅湖すがこ三方湖さんぽうこ日向湖ひなたこに久々くぐ子湖しこを巡るレインボーライン

水月湖今にして知る底年ねんこう縞は七万年の時を刻みつつ

爽やかな水月湖また菅湖ゆく船より水面に映る青き樹樹

湖の塩分濃度それぞれに少し異なるも同じ色かに

三百三十年前

蒲郡 杉浦恵美子

しあはせは一日一瞬あればよい毎度の食事には好物一皿

戴きしでっかい南瓜解体す面取りしたりスライスしたり

我が宿に三晩現はる蟋蟀を今宵は見ぬぞ残暑厳しき

摘ままむとすれば突つ張り抗へりベルテッセンの葉陰の尺取虫

地蔵盆最長老が居なくなり孫も曾孫も来ずなりにけり

コラージュや水彩折紙彫し何でも試した叔父の初盆

生菓子を二つ盛りしは甘党の叔父を偲ぶる叔母の習はし

共通の話題は叔父のことのみの叔母との会話半日続く

七年間空家の隣家が家仕舞ひ初秋に新たな隣人が来る

積み上げし隣家の遺品が雨に濡れ暮しの跡を曝して居りぬ

芭蕉翁が象潟見しは今年丁度三百三十年前陰暦六月

干菓子器の淡黄金色のヒバ木目素朴さ優雅さ能代春慶

梅 干

豊川 山口千恵子

擬宝珠の花二本の出てきぬうす紫の花のやさしき

漂白してま白になりし布巾三枚照りはじめたる夏の日に干す

自転車のわれをやすやす追ひこして高校生の自転車はゆく

朝よりセミの鳴く声かしましきカレンダーには今日は立秋

熱中症を連日ラジオは告げてをり水を飲まむよ二口三口

掛時計同じ時刻をさしてゐる電池切れなり時を刻めず

単三の小さき電池一つ入るる時計は動く時間がわかる

暑き日の続くをえらび日に干さむ漬けたる梅干し笹に広げ

しわよりて乾ける梅干し仕舞ひおく紫蘇に色付く赤色もよし

すりばちにすりてゆかり粉つくりをり紫蘇の香りのただよう中に

取りこみし洗濯物をたたみをり夏の日差しのぬくもり残る

猛 暑

横 浜 阿 部 淑 子

体温を超える猛暑に蟻達も右に左に日陰探しぬ

外出は危険という中コーラスに臆せず出かけ良い汗かけた

納涼祭施設者演ずる玉すだれ綿あめ西瓜割り童心に戻る

夜明け方夫は高熱熱中症冷ピタ冷水備えの効果

卒寿にてスマホデビューの嬉しさよ脳を鍛えて若返りの夢

日照不足

豊川 夏目勝弘

梅雨曇りつづきて庭のネムノ木に紅の失せし真白き花ばな

ダムの水僅かとなりぬ梅雨なれど末期の豪雨にただただ感謝
退職後に始められし菜園のドーナツ型のキュウリに感謝

暑いと言ひ寒いと言ひてクーラーに頼ることを我はなさざり

雨ふれば暑ければ厭ふは常ならむお日様に手を合はすは少なくなりぬ

山よりの川よりの恵みに助けられ生かされてこし一世なりけり

いと美味きアケビの果実にひとときの満腹感を味ひし日あり

山芋を掘りて米に野菜にと交換せしをフット思ひ出す

自然よりの恵みはすなはち太陽ぞ日照不足が今年もニュースに

一日の五時間余をスマホにて費す多し一生は三万日余のみ

花ばなは咲き盛るときは喜ばれ枯れれば捨てられる人間はいかに

コンクリートの橋の隅にあざやけき緑色せしホソウリゴゲが

『いっとうよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

人の声テレビの音も消されるよ雨降り降りてランダムにその声
咲くまへに咲く前にとぞ抜き取るに自生地となるか背高泡立草

牧原 正枝

ガラス戸にこつんと当る迷ひ蝶ふらふらしつつ草の間に入る
青空の残る夕方帯のごと茜に染まるひとすぢの雲

石田 文子

父母と子の部屋ゆゑできる断捨離も日々のすぎつつ梅雨の明けつつ
窓辺にて涼風の中緑葉を眺めしかの時しあはせの私

森 厚子

草の間にフウセンカヅラ風にゆれ細々咲けりこぼれ種かも
見あぐれば屋根に一羽の鳶のゐて翼わづかに濡れそぼちつつ

山崎 俊子

わが畑の芋の葉群の白露に名残の月は白白と照らす
夕ぐれに水撒きをればうすべにの日日草の花のこぼるる

三田 美奈子

紫陽花の濡れつつ開くその花の殊更青しありありとあり

水野 絹子

また一人父の朋友去り逝きぬ父母の煌めき茫乎の彼方

また明日台風襲来の報ありてわが前浜の白波立ちつつ

牧原 規恵

大鍋に真赤に実りしトマト入れる夫の育てしこのトマトかな

梅雨晴れの青空向けてシート干す飛行機雲は交差をしつつ

稲吉 友江

「さっちゃん」と呼ばれし母は穏やかな寢息をたてて九十二の夏

おほかたのことを済ませて旅に來し昨日のことは今こそ思ふ

鈴木美耶子

「オラ」と言ふ「こんにちは」にて迎へらるバルセロナの風吹く中にして

愛らしき赤き実つきて揺られぬる三年過ぎし数珠玉サンゴよ

吉見 幸子

時々孫らと暮らす東京の日常茶飯に心はつこり

現代学生百人一首

東洋大学

船に乗り海へ出ていく祖父の顔私が一番好きな顔

北海道美唄聖華高等学校三年

上野綾海

災害時夜中に飛び出す父の背がたくましいようで悲しいようで

北海道美唄聖華高等学校三年

越後屋勇成

溶接で火花を散らす鉄を見て幻想的だと感じる実習

青森県八戸工業高等学校二年

田畑裕斗

授業中膨らむカーテン人さう大きなあくび運よく隠れ

岩手県立花北青雲高等学校二年

照井結奈

すぐそこに君がいるのに喋れない心がうるさい破裂しそうだ

岩手県立盛岡南高等学校二年 菅原 凧

「お前」って君はいつも呼ぶけれど私の名前そんなに嫌い？

秋田県立秋田西高等学校一年 岩谷 ゆい

簡単なアイライナーの引き方を八十一の祖母に教える

秋田大学四年 加藤 菜々

そこに来てなぜ曲がるのだ台風よまるで子供の寄り道のように

山形県立酒田光陵高等学校三年 阿彦 達也

贈呈誌

森岡陽子

冬雷 9月号

○庭に立つ一樹に小雀の声聞ゆ夕べ薄暗き庭の片隅

池亀節子

○葉の裏の小さきバツタはそのままに虫喰いのなき紫蘇を収穫

江波戸愛子

○梅雨なれば雨を避けるか三階の屋根葺き終はる僅か一日

高田光

○縫ひくれし晒木綿のはだ襦袢はり目に一途ないろ残りたり

姉川美枝子

○笠置山の後醍醐帝ははだしにて口惜しげに立つ大木のもとに

稲田正康

○借り手無き田がをちこちに荒れてゐる平成最後の村曲がり角

武田清一郎

○東北の小さな駅に一人乗せ一人下ろして列車は発ちぬ

きすぎりくお

月虹 129号 8月

○匂ひさへしさうな歳時記を開けば父が甦りくる

駒ヶ嶺泰秀

○たんぽぽが大きくなつたらひまはりと思ひゐるらしそつとしておく

八幡道子

○咲き初めて四日の留守を惜しみがカサブランカは吾を待ち誇らか

山口京子

○山の手と海手を境ふ低きにし縫ひ目なしゆく貨車長きかも

鮫島満

鹿児島アララギ 8月号

○大雨警報出でたる夜更けに聞こえるマイクの声は「全員避難せよ」

森枝むつ美

○裏庭にひっそり咲きし山百合に透かさず揚羽の近寄りて来ぬ

市来房枝

○釣り船の漁師の料理してくれし伊佐木の刺身は旨しとも旨し

江藤金博

○暮れなづむ小さき集落のみ込むやうに蛙の鳴く声しげくなりゆく

千葉源治

心のふるさと 歌おうよ

高橋育郎 作詞

1 菜の花畑の 畦道で

おぼろ月夜を 歌ってた
遠いあの日は 夢のよう
心の窓に よみがえる
ふるさとの歌を うたおうよ

2 白波寄せる 砂浜で

われは海の子 歌ってた
少年の日の 思い出よ
水平線に くつきりと
湧き上がる雲は 忘れない

3 鎮守の杜から ひびいてる

4

笛や太鼓の にぎやかさ
きょうはめでたい 秋祭り
父につれられ 夜店の灯
心にうれしさ 点してる

北風吹いてる 寒い日も
風の子供だ とびまわれ
おしくら饅頭 鬼ごっこ
笑い転ころげる 声ごえが
天に明るく こだまする

5

四季折々の 彩りを
歌に託して 歌い継ぎ
人の心に ふるさとの
ぬくもり喜び かなでてる
美しき歌を うたおうよ

『俳句』

遠山は暮るるにまかせ鰯雲

山元正規

ひと筋の尾根笹原の露浄土

夕べには隙なきほど鰯雲

向きかへて地藏に止まる赤蜻蛉

森岡陽子

新涼や井戸のポンプの錆びし音

暮れなづむ末期の残る蟬の声

白壁に蜘蛛のはりつく夜長かな

松本周二

声多く秋の蟬こそ森の主

鳴の立つ孤愁や沼の水鏡

争ひに飽きて鳩笛吹く童

田 中 清 秀

鎌もたぐ青蟪蛄の目の円ら

花供ふ筒水熱き残暑かな

地引網銀鱗跳ねる鰯雲

浜 田 紀 政

鴨居より先祖見下ろす夏料理

颱風や外へ出たがる子を叱る

盆僧の衣ひらめくバイクかな

重 野 善 恵

遠雷に急ぎ取り込む濯物

山門に人の影なしカンナの子

夕霧にヘッドライトをはや灯す

山 迫 京 子

何も見えず霧と湯けむり露天風呂

いつの間に昭和も昔終戦日

霧雨に富士山見えぬひとり旅

今 泉 由 利

大鷲の片足立ちよ秋の風

かにかくに紅葉かんざし京舞妓

坂道の昼静かなり梅雨明ける

植 村 公 女

アンテナのみな同じ向き原爆忌

黙祷の短かき闇よ終戦忌

コスモスやフランス語めく津軽弁

今泉如雲

日本の梅雨は津軽に明けにけり

下北^{しもきた}半島の夏はや終はりてふ便り

今年また十三本の花魁草

杉浦弘

日蓮の切つ先の文字秋光裡

秋の夜眼鏡をとりに起き上がる

かさね吟行会

「東京湾野鳥公園」 八月

田中 清 秀

秋は立秋から立冬の前日までの九十日間を言う、俳句でもこれに従う例が多い。今年の立秋は八月八日だった、その翌日の令和元年八月九日、激しい暑さの続くなか、かさね吟行会は大田区にある東京都立東京湾野鳥公園を訪ねた。「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」（藤原俊行朝臣）はいつもこの時期に思い出す和歌である。暦の上では秋ではあるが、汗を拭いながらの炎天下の散策はやはりきつい。それでもどこかに小さな秋の気配を探し出す感性は名句を生み出す為には必要のようだ。この公園は、広い敷地に緑があふれる休憩用の椅子と机が置かれ、木陰の四阿には僅かに風が抜け、秋蟬の声にも心が休まる。都内にこんなのにびりした公園があるのは不思議なほどである。さらに木立を進み、「いそしぎ橋」を渡ると正面には淡水池や泥湿地が広がり、干潟には野鳥の群れが長閑に羽根を休めている。

野鳥の池細波たちて秋に入る

京子

一木を覆ひて葛の花高し
台風の気配を見せて野鳥園

由利
しのぶ

ここは、東京湾の埋め立事業でよみがえった自然を生かし、遠浅の海岸に出来た干潟に雨水が溜まりいつしか野鳥が集まるようになった。広さ二十四ヘクタールの大きな敷地はサンクチュアリー（鳥獣保護区）として整備され、一九八九年に東京都立の野鳥公園として開園している。年間一二〇種類の野鳥が観察されており、また、水辺にはカニやエビをはじめとする磯の小生物が生息する。野鳥の観察小屋には無料の望遠鏡が幾つも置いてあり、バードウォッチングの名所となっている。潮入の池が見渡せるネイチャーセンターには空調完備の観察室があり、また、磯生物の展示室や図書コーナーも完備している。また、地下階には干潟に下りる遊歩道があり、生きているカニやハゼ、その巣穴などを間近に察することができる。

さる星のクレーターとも蟹の穴
飛鯊の泥をまとうて消えにけり
潮入の干潟の沙魚の隠れ穴

周二
さち子
陽子

広々としたネイチャーセンターの窓からは、葦原のアオサギ、カルガモ、カイツブリなど居ながらにして眺めるら

れる。特に、カワウの群れが暑さで首をうなだれたまま
いつまでも動かない、近くの干潟を占領するその数は数
百とも思われ黒い塊となつてすぐ目の前に見えている。

羽田空港は、近時の国際線の増便で快適なホテルが
続々と増加した。空港への周辺は穴守神社や池上本門寺
など由緒正しい神社仏閣のある地域であるが、離着陸数
が年間の四十万回を越える現状から空域規制の緩和や更
なる滑走路の拡張整備、合わせて連絡橋や海底トンネル
の新設計画が検討されていると言う。この公園からは離
発着する数多くの飛行機の機体が地平線すれすれに見る
ことができる。

秋暑し飽くまで動かぬ鳥の群

秋の空白き機体のきらめきぬ

機影北へ水と戯むる渡り鳥

新涼を水辺の風に少しだけ

清秀

れい子

紀政

正規

秋は古から多くの俳人によって読まれてきた、また、
初秋、仲秋と晩秋を三秋と表現する。初秋は、まだ厳し
い暑さがなお残る残暑、夏とは違うしみじみした涼しさ
を蒸し暑さの中で感じる新涼、また、秋になつてからも
気温が高く晴天が続いく秋暑しなど、残る暑さの倦怠感
や疲労感を表現する季語が多い。どうにか早く、紅葉や
菊の花、虫の声や名月を愛でる風流で過ごし易い季節が

来て欲しい。

句会はネイチャーセンターの休憩スペースを借りて行っ
た。人はほとんどおらず涼しく快適な場所にテーブルと
椅子を並べただけだが、俳句作りには大変に贅沢な場所
であつた。いつもの三句出し四句選で無事に終了した。

帰りのバスは意外と通勤客などで混んでいた、また、
蒲田駅へのバスは迂回ルートを進んだ為に時間が懸か
り、公園までの交通アクセスはあまり良くない。ただ、
蒲田駅周辺には多彩な飲食店が軒を連ねていて、特に味
自慢の餃子店が多いことでも知られている。と聞けばや
はり打ち上げは餃子店ということになる。残暑厳しい
中での吟行の最後は、反省会を兼ねて暑氣払いの乾杯を
して散会となつた。

■ かせね吟行会 ■

日時 二〇一九年十月十一日（金）

場所 田無演習林（東大農場）

集合 西武新宿線 田無駅 改札口 十時半

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（九〇）

丸山 酔宵子

水路は埋（う）む臺灣藻（たいわんも）の花＊

北原白秋

『柳川の泥鰌鍋』

博多天神から西鉄特急「水都」で北原白秋の故郷柳川へ。柳川藩主立花家の柳川城の城下町として発展した水郷である。

延べ60キロメートルに及ぶ柳川水路は当初より舟の往來に利用され、城堀の深く内部まで入ることが出来ていた。川底が浅く複雑に絡み合った水路や狭い水門を通るのは細長い平底舟、漕ぐのは一本の竿のみ。その巧みに水郷を行き来する舟の姿がハゼ（どんこ）のようで「どんこ舟」と呼ばれている。

赤煉瓦の並倉（なみくら）や白いなまこ壁を見ながら掘割をゆっくり進んでいると「・・・これから低い石橋をくぐります。頭を低くしてください・・・」と舟頭さんが一本竿で起用に狭い石橋下を潜り抜ける。

橋ぎはの醤油並倉西日さし

しつとりと青々とした木々と柳と花々に包まれて一時間、いよいよ柳川城跡地の一角にある7千坪の国指定名勝・柳川藩主立花邸「御花（おはな）」である。

柳川藩のルーツは、豊臣秀吉の九州平定に先陣として活躍した立花宗茂が、その功により筑後13万石柳川城主となり明治維新まで続く。以後立花伯爵家に引き継がれてきたが、明治末期十四代立花寛治によって現在の建物の新改築が行われ、白亜の西洋館と和式大広間、宴遊会場といった瀟洒な建物を整えたのである。そして、それらを包み込むように、クロマツに囲まれた仙台松島をみたてた広大な池庭「松濤園」が設けられている。

現在、「御花」御殿は当時を偲ぶミュージアムとして一般開放されているが、伯爵家に引き継がれた立花家の伝統には驚かされる。秀吉の文祿・慶長の役には立花家も朝鮮に出兵し、その当時の立花家精鋭武士が被った黄金兜が、長く広い大広間の欄間一杯に整然と飾られ、そ

れは一見すべき壮観さと驚き。

柳川と言えば「鰻のせいろ蒸し」が名物で、「松濤園」を眺めながらの贅沢な料亭が「御花」には用意されている。「立花家史料館」に隣接していて、丁度昼過ぎ、庭が一望に見える窓際のテーブルに一人予約。「この御花特盛コースと、生ビールをお願いします・・・」鰻のせいろ蒸しに有明海珍味、有明海苔、それにどう言う訳か泥鰌（どじょう）の柳川鍋（つまり泥鰌鍋）がついているのである。「柳川鍋は柳川が発祥の地ですか・・」「いえ、滅相ありません。柳川鍋の発祥は江戸ですが、一寸した洒落ですよ・・・」

乾いた喉にビールを飲みながら池を眺めると、白鷺が優雅に羽を広げている。

柳川のなめこ壁なり泥鰌鍋

酔宵子

因みに、「臺灣藻の花」は別名布袋葵（ホテイアオイ）でウォーターヒヤシンスのこと

楽しい時間 83

山本紀久雄

2019年8月31日

神にならなかつた鉄舟・・・その十三

慶応4年（1868）3月14日、勝海舟は三田の薩摩屋敷で西郷と会見し、徳川方からの嘆願書を手渡し、これを受け取った西郷は、即日、江戸を発し、総督府に戻り、大総督官に報告、さらに京都に行き、3月20日に太政官代に出頭、勅裁を仰いだ。種々の意見が提出されたが、結局西郷の斡旋によって、「慶喜から謝罪の申し出があつたから、慶喜の命は助け、水戸にて謹慎することを認める」という勅旨となつて、4月4日、勅使橋本實梁、柳原前光が江戸城に入り、田安中納言慶頼に朝命を伝達したのである。

これにより江戸無血開城が正式に決まつたわけであるが、この背景には西郷の働きが大きく貢献していると容易に推測できる。実は水戸藩と西郷は深い関係があつた。

安政元年（1854）3月、西郷は斉彬の江戸参勤に際し、初めて江戸詰めに任ぜられた。江戸に着いた西郷は、すぐに以前からは非会いたいと願つていた水戸藩の藤田東湖のところへ向かつた。水戸藩は、光圀以来学問を尊び、尊王思想が盛んであつて、心ある青年にとっては、聖地的存在であつた。

当時の学問は言うまでもなく儒学である。儒学には孔子以来、大義名分の思想がある。これは絶対善の主体を定めて、これに反するものは悪、これに順うものは善とすることである。

江戸時代の日本の儒者らは皇室を絶対善とした。これは当初は儒学だけの考え方であつたが、中期に国学がおこると、国学者らは国粹的気持から、やはり皇室の絶対尊厳性を主張した。

こうして幕末に近い頃になると、日本の知識人——武士階級、庄屋、豪農階級、大町人等は、みな尊王思想を持つようになつていったから、尊王思想は水戸だけのものではない。

したがつて、水戸藩が単に尊王思想がさかんであるだけでは、青年らの心をひきつけはしない。水戸が魅力ある存在となつたのは、水戸の学者らが尊王思想を時局救済の中心精神とする思想へ論理構成したからである。

西欧の船が日本海に出没し、北方にはロシアがあらわれ、時に乱暴をはたらく。何となく国難が来ているという感覚になつていた時代、これに水戸藩が最も敏感に反応した。

藩主斉昭（烈公）はときりに幕府に建白する一方、自藩の軍備を充実させ、水戸の学者はしきりに皇室を日本人の精神のよりどころとする国体の美しさや国粹思想を説いたのである。

他の学派が外国の脅威が迫っているのに、何の対策を持たなかつた時代に、水戸学は対策を持つており、その実行にも乗り出している。これは当時の青年らにとって魅力でないはずがない。

その上、斉昭の受難が加わつた。斉昭の急激な軍備拡張の動きに、幕府は疑惑を抱き、ついに無理隠居させ、閉門同様な処分にした。

この受難は、かえつて斉昭の名声と水戸藩への評価を高め、水戸信仰が巻き起こり、斉昭は救世主のように崇拜され、その信任を受けている藤田東湖、戸田蓬軒の二人は「水戸の両田」と呼ばれて、天下の青年らに仰ぎ慕われた。

吉田松陰も、橋本佐内も、坂本竜馬も水戸人と交際し、水戸学者の指導を受けた時期がある。水戸は維新運動の精神的震源地だったのである。

西郷も同様で、江戸に着くとすぐに今の後樂園一帯を占めていた水戸藩の上屋敷に住む藤田東湖を訪ねたのである。

西郷が繁々と東湖を訪問していることは、母方の叔父権原与右衛門と權兵衛の二人にあてた手紙からもうかがえる。

「東湖先生のお宅にうかがいますと、清水に浴したようので、心中一点の雲霞なく、ただ清浄な氣持となり、帰りを忘れるほどです。お察しください。」

このような体験を若い時代に持つている西郷であるから、当然のことながら水戸藩出身の慶喜に対しても、それなりの救いの行動を京都で採ったであろうと容易に察せられる。

それが4月4日の勅使橋本實梁、柳原前光から田安中納言に伝達された朝命《実父である水戸贈大納言（斉昭）の積年の勤王の志業も深いものがあるので》という文言につながったのであろう。

さて、慶応4年（1868）3月14日、三田の薩摩屋敷での西郷・海舟会談で、海舟のみが刀を持ち、それが右側に置く「下絵」と、左側においた「画題考証図」が存在していることは既に述べた。

武士の刀の持ち方について、種々の資料を調べてみると次に通りであった。「刀を掲げる場合は刃を上にして右手に持つ。座した時には右側、あるいは右斜め前、または両膝の前方に柄を左にし、刃を内側にして置く。つまり、刀を置く場合に刃を他人の方に向けないようにする。（『日本剣道及刀剣』萩尾孝之著 東京開成館発行）

勝海舟も自らの刀について『新訂 海舟座談』（巖本善治編 勝部真長銅校注 岩波文庫）で、以下のように述べている。

《私は、人を殺すのが、大嫌いで、二人でも殺したものはないよ。みんな逃して殺すべきものでも、マアアと言って放つて置いた。（中略）刀でも、ひどく丈夫に結わえて、決して抜けないようにしてあつた。人に斬られても、こちらは斬らぬという覚悟だつた。》

このように述べる海舟、10代の頃から島田虎之助に入門、剣術・禅を学び直心影流剣術の免許皆伝となり、16歳で家督を継ぎ、弘化2年（1845）から永井青崖に蘭学を学び赤坂田町に私塾「水解塾」を開く。安政の改革で才能を見出され、長崎海軍伝習所に入所。万延元年（1860）には咸臨丸で渡米しサンフランシスコ上陸、封建時代の日本では数少ないアメリカの民主主義を見聞き体験、帰国後に軍艦奉行並となり神戸海軍操練所を開設。鳥羽伏見の戦いの後、官軍との戦いを主張する小栗忠順に対し、早期停戦と江戸開城を主張し、慶応4年3月14日に徳川家を代表して薩摩屋敷で西郷と会見した海舟であるから、当然であるが幕末時における文武両道に秀でた得難き人物である。

このような海舟であるから、日本刀のとりあつかいは、武士として真つ当な常識・良識を持つていたはず。

以上の検討から、「江戸開城談判」壁画構図は、武士としての常識・良識からおかしいと結論化でき、二世五姓田芳流が描いた右脇に刀を置いた構図の「下絵」が妥当だと判断する。

絹の話（107）

「アトリエテレビ」 今 泉 雅 勝

絹の考古学入門 （その2 糸質、織密度の変遷）

絹の繊維は時代と地域により変化

小氷河期が過ぎた1万年〜8千年前、地球の温度が現在より5℃近くも高くなり、針葉樹から広葉樹が繁茂して来ました。桑の木も、その葉を食べるクワコも大いに繁殖し、その環境の中で、中国の浙江省付近で野性のクワコから家畜化された1化性蚕（年1回羽化）の小型な家蚕が誕生しました。

それらの蚕は北や南に伝わり、より温暖な南に伝播したものと、寒冷北に伝わったものでは、気温違いで餌の量と桑の葉の栄養素の違いで、数千年という長い間に様々な品種に分化して行きました。

糸質も地域年代によって南の丸みのある糸、北のやや扁平な糸など様々になって行きました。

絹繊維の変遷

発掘される絹は人骨に付着していたり、刀剣などの柄

に巻かれていたり、漆と絹で作られた棺の一部であったり様々です。

古いものを鑑定する為には、それらの絹がいつの時代、何処で作られたか特定する必要があります。放射性炭素測定などでは100年前後の誤差がありますが、おおよその年代測定は出来ます。しかし何処から運ばれて来たかは判りません。

近年それを特定する新たな三つの方法が（京都工芸繊維大学、布目順郎教授提唱）定着して、放射性炭素測定より細かな年代測定が出来るようになりました。その手法によれば何時の時代のどの地域で作られた糸か、おおよそ見当がつくようになりました。

この方法により世界の博物館などの年代未確定絹収蔵物の数々の年代確定をする事が出来るようになりました。その一つは糸の「断面積」（糸の切片を作り、セリシンで固められた2本のフイブロインの片方の面積）を測る方法です。この断面積はその地域の年々の気温の変化に微妙に連動しているのです。その僅かな違いを読み取る方法です。これは古代から現代迄の気温の変化の記録と発掘された膨大な絹の断面積計測データの蓄積のたまものといえるでしょう。

次に糸の「断面積完全度」（断面積を計った半お握り型繊維の最長で円を描き、円の面積と繊維の面積の空間

率)を測る方法です。気温が低い年代や地域では数値が低く、糸がやや扁平になり、気温が高いと逆になります。絹糸は時代と共に微妙に変化しているのです。

更に「ウラジネス繊維」(糸からはがれたほんの微細な枝毛)を観察する。

中国の漢の時代以前までは繭から揚げた生糸のニカワ質部分を精練して取り除く事が無く、ハリハリした状態で利用されたようで、糸はニカワ質に固められていて枝毛は出ないので、時代判定の一つの根拠になっています。

織り密度

絹は他のどの繊維より細い糸を作る事が出来ます。

一つの繭から揚げた糸を忽たちと言ひ、5個の繭から揚げた糸を「糸」といっていました。

今日、糸と云えば撚りが掛かっている物が普通ですが、新石器時代から春秋戦国時代までの中国では、絹織物は撚りのかかつていない無撚糸を使っていました。

殷の時代頃になっても撚糸技術は未発達でしたが、経糸(たていと)80本緯糸(よこいと)30本(1センチ四方)という非常に細い糸を作り、織の技術は全て平織りですが、薄い織物を作る技術をもっていました。漢の時代までには撚糸、精練技術が発達し縦糸120本と云う極細糸で絹が織られるようになり、この様な絹織物を蟬

の羽根の様に薄く霧のように柔らかいと言いました。

唐の時代になると地球の気温が現在より2℃ほど上昇して、織度も太くなり、織り密度も経糸68本緯糸36本といったやや粗な物に変化します。宋の時代になると多彩な文化が花開き、絹織物技術も多岐に渡って来ます。

日本では縄文式時代の繊維の発掘物は苧麻、大麻、藤などの様々な植物繊維が紐や縄なはに使われていて、稀に絹と思われる痕跡が土器等の付着物にあるようですが、衣類としての織物は発見されていません。

弥生時代になって無撚糸の織物が出土されますが、平織りで、織り密度は粗い経糸28本本緯糸18本くらいの物が多く、中国に比べて製糸技術が未発達であった事が伺われます。それら等の糸は繭から直接糸を引き出す「ずりだし」又は真綿から撚りをかけずに引いた「紬」であったようです。この方法は古墳時代まで続きますが、弥生時代末期、卑弥呼が魏帝に献上した和錦も紬糸を使った物であったのでしょうか。奈良時代になると撚り糸の織物が多くなり、織り密度も経糸50本緯糸35本前後の物が多くなって来ます。室町時代になると人の趣味趣向が多岐に分化して来て、経糸緯糸の本数が接近した織物など多様な染織文化が花開いて来ます。

本田カイト普拉クティク先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2019年9月13日

自然の予防法

夕暮れになると

焦りや寂しさを感じたりします

これは原始時代

夜が野生生物に狙われる危険

すなわち明日の朝も生きていられるか？

というDNAが残っているからなのでは？

なんて勝手に思ったりしています(笑)

涼しくなってきました

このブログを読んで下さっている患者さんは

かなり健康意識が高い方達です

そろそろ風邪予防を！

と思っただけじゃないと思います

普段の睡眠 湯船 水分補給 ゆたぼん以外に

マヌカハニー

ハーブティー

をお勧めします

マヌカハニーは度々書いています

ハーブティーなんですが私は

免疫力 粘膜補強 安眠

などをメインに配合されたものを

就寝前に飲んでいきます

本田カイト普拉クティクで

施術を受けて下さっている患者さんなら

こういった自然の物をでも

効果がとても出やすいです

良かったら予防法として試してみてくださいね

2019年9月11日

雨とともに気温が下がる

日が暮れるのが早くなり

夜が明けるのが遅くなりました

当たり前の事です

何でも表裏一体です

蚊といえば夏場に元氣と思いきや

雨が増え涼しくなると

蚊が元氣になってきます

これから蚊取り線香の季節かもしれません(笑)

ということとは

いよいよ季節の変わり目です

身体が様々な変化が出てきます

ギックリ系

頭痛

睡眠の問題

などなどです

腹八分を意識して

食べ過ぎに気をつけましょう

あと

涼しくなると小便の回数が減ります

1日8回は小便が出る様な水分量を

目安に摂取していきしょう

「江上浩二の独り言」 22

江 上 浩 二

何種類の英語？

これは私が約20年間勤めた米系外資系企業で数多くの英語の訛りを聞分け体験した話で、世間一般論ではない事を断っておく。日本では小さい子供、学生、社会人がパラノイアの如く、英語病に罹っているようだ。英語が出来れば、全ての事が上手く出来るようなことまで言う言葉はツールであって、本来は小さな子供が好きでやりたい事、学生も然り、受験や試験のスコアーだけでない、社会人も実務で何を解決したいのか、ある特定な実務能力・資格も合わせ持つと英語も活きるのは間違いない。一生海外も行かず、仕事でも英語なんて関係ないという方も多いはずで、無理に英語に時間を費やさず他の事に没入した方がいい。

しかし、非英語圏で英語を通して生活・仕事をし、営んでいる方は非常に多い。私はそういう方々と仕事を通じてお会いし、勉強させて頂き、20年間で倍の40年を経

験出来たと思っている。簡単に結論付けると、訛りは気にせず、まずは相手とコミュニケーションを取り、何がしたいのか、何をして欲しいのか、意思疎通を取ることだ。

移民社会の先端に行く米国で英語を母国語として生活している所謂白人系の方でも自分の祖先がいつこの地域からアメリカの地を踏み入れたのか定かでない方も少なくない。祖父、曾祖父くらいだと新人で出自がわっている。先ず、仕事仲間だった国を列举すると、スコットランド、アイルランド、英国、ドイツ、フィンランド、ロシア、イタリアも含めておく。意外と少ない。

一緒に仕事をしていて、ちょっと時間が出来ると出自を話してくれる方も多い。その方の family name をみると出身国が解ることが多い。ロシア系の方は私より20近く年上の R&D 分野のリーダーをしていた。俺の小さい頃は NEC のアパート住まいで、車もなくメトロを使っていたよ。そして工科系の大学へ進学、卒業、そして世界で有数の企業で仕事を待た。実は祖父がロシア革命を逃れて米国にたどり着いたそうだ。貧困からのサクセスストーリーに違いない。アメリカから日本へ出張の際に母

親を連れて、都内の私の自宅まで遊びに来てくれた方、わざわざ休暇をとりアメリカから日本へ娘さんを連れて、自宅まで遊びに来てくれて、初めて食べる寿司になかなか箸が出なかった娘さんなど、楽しい交流も思い出す。

次に、ご自身、もしくは親と供に米国へ来て、国籍でなくグリーンカードで居住・教育を受け、仕事をしている方の母国を上げてみる。非居住者で *resident* として来て、仕事上のプロジェクト仲間の母国も含めている。英国・スコットランド、ドイツ、フランス、台湾、インド、香港（返還前）、イラン、ブラジル、ソビエト、モロッコ、中華系シンガポール、マレーシア、オーストラリア（英系、中華系）、クロアチア・ボスニアヘルツェゴビナ。

皆さん、少なからず生き様のストーリーをお持ちであるが、台湾出身の方の話は凄い。家族は第2次大戦時蒋介石派の軍人で、歴史で明らかなおと、台湾へ逃れ、兄弟がバラバラとなったそうだ。お姉さんが新疆ウイグルに居て、政権の違いで会うことも出来ずにいたそうだ。知人は仕事で米国から中国本土の新疆ウイグル地区を訪れるチャンスがあり、その際現地の人に自分の家族の経

緯（いきさつ）を話すとお姉さんの住む奥地までジープで4時間位の行程を連れて行ってくれたそうである。クレオパトラにそっくりな（私が勝手に想像）モロッコ出身の女性、石作りの家を新築したフランス人は、セメントは1年掛けてゆっくり乾燥させるものだ、ドイツのソーセージの食べ方（味の薄いものから濃く辛いものへ）を教えてくれたボス、次のスコットランド出のボスはスモークリーなスコッチの飲み方を、都内六本木で我々日本人が関心も無かったベルシャ料理の店を教えてください。ラク出のエンジニア、任天堂のゲーム機がまだ珍しかった時、ブラジルの営業担当は米国で Nintendo を探し回った時、子供へ土産とした。

母国語に強い影響を受けた訛りは強弱・イントネーションの置き方、言葉の間が独特なだけで、アップルは *Apple* だ。英語はひとつで、訛りが無数ではないが無数あるようなイメージだ。今でも耳の訓練のつもりで早朝のリアルタイムで CNN や CNBC 番組を観て聴いている。

漢詩研修 (三十六)

千代田岳精会 平井茂行

一乗寺に遊ぶ

伊藤 仁斎

秋色蒼茫翠微上

雲老樹に交わり雁初めて飛

山園柿熟し鳥銜んで去り

溪澗葦稠く人負うて帰る

市遠ければ看す塵の漠々たるを

林深ければ只見る霧の霏々たるを

尋ねて欲す他日身棲まむる処

比叡山前野水の磯

【作者】

伊藤仁斎（一六二七—一七〇五年）江戸時代初期の儒者。京都の人で、幼名源七、名は維楨（これえだ）字は源佐（げんすけ）、仁斎は号。父は材木商であったが仁斎は商人を嫌い学者を志す。古義学（論語や孟子の正しい道理を明らかにする学問）を主張し古義学派（堀川学派）を創始し塾を古義堂と称した。門下は三千余人に達したという。著書に「心学原論」「性善論」「論語古義」など文集・詩集が多数ある。長男が伊藤東涯である。宝永二年三月病のため没す。年七十九歳。

【語釈】

* 一乗寺：京都市左京区一乗寺町。当時山紫水明の地であった。* 翠微：山の七・八合目付近。ここでは瓜生山の中腹。* 山園：山家の畑。* 銜：口に含む。* 溪澗：谷川。* 蕈：茸（きのこ）* 漠漠：遠くはるかなさま。* 霏霏：深く立ち込めているさま。* 野水磯：河原。

【通釈】

秋の気配はどこまでも広く青々として瓜生山の中腹あたりまで上り、さらに頂上を仰げば雲は老樹と交わるように低く垂れて、折から今年はじめて見る雁の群れが列を成して飛んでくる。

少し歩を進めると山家の畑には柿が熟しており、それを烏が口に含んで飛び去ったり、また谷川近くは茸がたくさん採れるというので、それを背負って帰ったりする人を見かけるこのあたりは町から遠いので車馬や人のあがる塵埃（じんあい）は全く見えず、また林が深いので見えるものといえば深く立ち込める霧ばかりである。将来、隠棲の地を探すとしたら、比叡山の麓の清澄（せいちょう）な水をたたえた河原のあるこの一乗寺村あたりであろう。

【備考】

この詩は京都一乗寺村から望む風情を詠じたもので、一六九七年（元禄十年）仁斎七十一歳の作といわれる。

『奥の細道 人の世は美しくも儚く』

中屋保之

(末の松山 元禄二年五月八日)

それより野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は、寺を造りて末の松山と云。松のあひく、皆墓原にて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も、終にはかくのごときと、悲しさも増りて、塩かまの浦に入逢のかねを聞。五月雨の空、聊はれて、夕月夜かすかに離れ島も程かし。あまの小舟こきつれて、肴わかつこゑに、「綱手かなしも」とよみけむ歌のこころもしられて、いとあはれ也。其夜目盲法師の琵琶をならして、奥上るりと云ものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子打上て、枕ちかうかしましけれど、さすがに辺国の遺風わすれざるものから、殊勝に覚るる。

多賀城で「壺の碑」を見た芭蕉一行は、新暦でいう六月二四日に野田の玉川や沖の石を訪ねている。「末の松山」とは、陸奥（みちのく）の古地名で、当時、海辺近くにあった多賀城市の宝国寺背後の丘陵地とされる。芭蕉は、嘗ての景勝の地が今や一面の墓地になってしまっている姿に人の世の儚さを感じたのであろう。

勅撰和歌集「古今和歌集」（延喜五（九〇五）年の序文「仮名序」で、貞観十一（八六九）年五月二六日にこの地を襲った地震による津波が「まつ山のなみ」として記述されており、以来、多くの歌の枕詞として使われている。一千百五十年も前のことであるが、私たちの記憶には僅か八年前の東日本大震災として記憶に鮮明である。

芭蕉と曾良の二人は前日塩竈に到着して、周辺を散策し、夜は鹽竈神社近くの法蓮寺門前の宿「治平」に投宿した。ここへは仙台の加右衛門の紹介状があった。

明けて五月九日は五月晴れの快晴。早朝、鹽竈神社などを拝観した後、正午には船に乗って松島に渡ったのである。

(松島 元禄二年五月九日・十日)

抑、松嶋は扶桑第一の好風にして、をよそ、洞庭、西湖を恥す。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたふ。嶋の数を尽して、敬ものは天を指、ふすものは波に匍匐。あるは二重にかさなり、三重に畳て、左にわかれ右につらなる。負るあり抱るあり、児孫愛すかことし。松のみどりこまやかに、枝葉汐風に吹たはめて、屈曲、をのつからためたるかことし。其気色甯然として、美人の顔を粧ふ。千早振神のむかし、大山すみのなせるわざにや。造一化の天工、いつれの人か筆をふるひ詞を尽さむ。

雄嶋が磯は地つ、きて海に成出たる嶋也。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有。将、松の木陰に世をいとふ人も稀く見

え侍りて、落は、松笠など打煙たる草の庵、間に住なし、いかなる人とはしられすなから、先なつかしく立寄ほどに、月海に移りて、昼のなかめ又あらたむ。江上に帰りて宿を求れば、窓を開、二階を作て、風雲の中に旅寐すること、あやしきまでたへなる心地はせらるれ。

芭蕉は、ついに松島で句を詠むことは無かったという。代わりに、同行の曾良が一句詠んでいる。

松島や鶴に身をかれほと、ぎす

曾良

(石巻 元禄二年五月十日・十一日)

十二日、平和泉と、心指、あねはの松、緒たえの橋など聞伝て、人跡稀に、雉兔、菊蕘の往かふ道、そこともわかず、終に路ふたかへて、石の巻といふ湊に出す。《中略》宿からんとすれど、更に宿かす人なし。潮々まどしき小家に一夜を明して、明れば又しらぬ道まよひ行。袖のわたり、尾ふちの牧、まの、かやはらなど、よそめにみて、はるかなる堤を行。心細き長沼にそふて、戸伊摩と云所に一宿して、平泉に至る。其間廿余里程と覚ゆ。

十二日とあるが、実際には十日、いよいよ念願の平泉へと出立した芭蕉たちは、途中、歌枕として有名なあねはの松や緒たえの橋へ向かったが、迷いぬいてようやく石巻へたどり着いた。

「あねはの松」には、用明天皇（在位 五八五〜五八七）が各地から「女官」を選ぶ際、陸奥国の代表となった気仙郡高田の豪農の娘「朝日姫」が姉齒の里で重い病氣になり息を引き取ってしまった。哀れな朝日姫を姉齒の人たちは丁寧に葬った。その後、妹の「夕日姫」が代わりに都へ向かうこととなり、旅の途中で姉齒の地に立ち寄り、墓に松の木を植えて墓印とした故事が歌枕として詠まれる様になったという由来がある。また「緒たえの橋」は、嵯峨天皇（在位 八〇九〜八二三）に寵愛された「おたえ姫」が都を追われ、会えずに過ごす毎日を悲観して橋の架かる緒絶川に身を投じたという伝説から、悲恋の歌枕となった場所である。

栗原や姉齒の松の人ならば都のつとにいさといわましを《姉齒の松が人ならば、都に連れて行きたいものよ》在原業平（伊勢物語）

芭蕉は、どうやらこの地には行き着けなかったようである。

《参考文献 岩波文庫 上野洋三・櫻井武次郎校中 芭蕉自筆奥の細道 日本伝承大観田中など》

城を觀て感有り

横山精真

元來主從がんらいしゅじゆう 艱難かんなんに耐たえ

遂ついに啓ひらく泰平たいへい 盤石ばんじゃくの安あん

旦夕たんせき龍城りゆうじゆう 松影しょうえいに映はえ

乙河おつが緩緩かんかんとして 瀾なみを觀みせず

觀城有感

元來主從耐艱難
旦夕龍城映松影

遂啓太平盤石安
乙河緩緩不觀瀾



令和元年の中部地区研修は八月十日、岡崎市セキレイホールで行われた。

先ず個人的にはこの週風邪を引き、前日二日間は寝込み、ふらつく体で辻寛風と移動、何かと支障なく声が出て有難かった。深浦精正先生とで指導にあたった。夜は三河の幹部十七名で打ち上げた。十二日には川崎市連の大会が控えていたが、まよと飲んだ。楽しく歓談し酒が進む内に、風邪は勢いで完全に安らいで行くのを覚えた。

その夜はすぐ休み、翌十一日朝は気分良く目覚めた。入浴し、早めの朝食をとった。岡崎ニューグランドホテルの九階である。深浦会長も言っておられたが、ここは吟魂碑除幕式の折。家元と一緒に三河の人々と夕食を戴いた所であった。

あの時は暮れなずむ夕焼けに岡崎城（龍城）と乙川おとがわの流れが遠い景色と相まってとても美しく詩的であった。この度は朝食を一人で窓辺で楽しんだ。朝の景色も美しかった。

旅の愁いと云うのだろうか。あの時座った席も家元を取り巻く何とも言えない雰囲気も思い出された。家元もお元氣だった。

昔、戦を制して太平の世を築いた家康。それが人質として幼少時代が始まり、家来たちは何とも身の寄せどころもない様な時代を経ている。

形の良いお城を飽くことなく眺める。乙川は鏡の様な水面で瀾一つ立てない。龍城が家康なら木々の緑は三河武士であり、川の流れは二百六十五年の太平の世である。

祇園にて

今 泉 由 利

絵を描く基礎のひとつ、人体を正確に把握するという
がある。

私は、いつまでたっても基礎の部分から抜け出せない
でいる、というか、これで充分ということなどないのだ
から、一日のことが終わった夕刻から、モデルがモデル
してくれるアトリエ
に、クロッキーにゆ
く。

五分ポーズや十分
ポーズをおいかけ、無
我夢中になっている
時、このアトリエを
管理している絵描き
さんが、「舞妓を描き
にゆきませんか」と、
誘ってくださった。

未だかつて、「舞妓
を描きたい」とか「舞



妓の絵」とかの発想はなかったけれど、とっさに「ゆき
ます」と、返事をしていた。

地図を渡され、京都祇園での現地集合。

事情はよくわからないまま、「立ち姿だろうか、座り
ポーズかな」、どちらにも対応出来る画材を重く携え、
まず、八坂神社にお参りし、祇園への心構えを。

この辺りまったく縁がないみたいだけれど、本当は、
無いわけではない。

子供達の父親の従妹が、「一力」に縁組みをしている
のだから。

目指すお茶屋を探し当てる。祇園の格子戸の中になど、
やたらに入れるものではないのに、お茶屋のおかあさん
に丁寧案内され、夜ではない昼間のお座敷へ。

私を含め総勢五人が集まった頃合、おこぼの音が、遠
くより近づいてくる。

舞妓になったばかりという十九歳の佳菜子さんの正
装。伝統に何一つたがわず、割れしのぶに結われた髪に、
赤い鹿の子が見え隠れ、銀のビラカンがキラリと揺れる。
「明日からは、松どすけど、今日まではもみじど
す」と長く垂れ下がる紅葉の簪。幅広いだらりの帯、

お茶屋とは、飲み物食べ物は仕出しや料亭から、とは知っていたけれど、私達への三時のおやつも喫茶店からコーヒートサンドイッチがとどいた。



帯揚げ、帯留め。立派な刺繍の衿。長く引く着物、端折らなければ歩かれもせず。そのうえ、お座敷籠、いわゆるハンドバックをもち。華奢な舞妓が二十キロにもなる正装で、二十分づつの固定ポーズをとってくださる。舞妓を描くということになれば、仕来りの何一ついかげんにして良いものではなく、襟足が二本足に塗り残され、顔刷毛でみごとに真白く塗られた顔の、髪の毛が生え際が細く塗り残され、本当の肌を垣間見せる。下唇にだけ紅が差され、目尻と眉にも小さく紅。

休み時間の入りつつの四時間には描きかねる事も多く、着物の模様など後で描けるよう、写真にのこす。

ここを私邸とするおかあさんの、どこまでを、とのけじめを知る。

常と異なる、固定ポーズ、などということにさぞ疲れたことのように、いやな顔などすることもなく、もう何百回もされただろう素人の質問にあかるく答えてくれ、人と上手に付き合う術のみごとさ、歴史を感じるとともに、いたいけなさも。

描き終わると言うにはいたらなかったことに、おかあさんは「いつでも電話をしてください、席を設けますから」と。私は、もうここで一見さんではなくなつた。自分の意思でここにこられる

今まで見た事のある、上手な、きれいに描かれた舞妓ではなく、身近に感じた息吹き、モデルして下さった舞妓の内から滲み出る雰囲気、描きあげたい。

朝丘雪路さんが、京都を散策し、お茶屋遊びをするテレビ番組をみていた。

お座敷で舞妓が踊っている、「あの帯、見たことがある」。モデルをしてくださった佳菜子さんでした。描きに行った時には見られなかった踊り姿もみられたことに、何か加はる気がしている私の絵。

ヤマノイモ (1) 夏目勝弘

梅雨曇りのため、太陽の出ない日が一週間以上つづいた、ある朝、眠りから覚め、木全体が緑色になった、ネムノ木。

なんとなく違和感を感じ、目を懲らして見ると、花がすべて真白である。

あの淡いピンク色が、どの花にも出ていない。一瞬不思議に思った、もう一週間も太陽の光に当たっていない。

あらためて太陽の持つ力というか、崇高さを思い知らされた。当地方にも始めて、大雨注意報が携帯のメールに入った。

大きな雷鳴が南に轟き西へ西へと移り、そして北で暫く止まり、東の空へと移り、雷鳴も小さくなった。

その間、雨は滝のように少し大袈裟かもしれないが、降りつづいていたが、海拔三十八メートルの我が家、雷鳴が小さくなると共に眠ってしまった。

○雨期に入りまだ葉をもたぬ自然薯の太しき蔓庭木をまけり 鹿兒島寿蔵

梅雨も終りに近づき、我が家の庭の生垣にも数本のアマノイモが有り、掘ることもできず、生垣を被うまでになつてしまふ。

今は太い蔓のみが伸びている、あまり長く伸びないうちに切つてはいるが、最後はヤマノイモの思うがままになる。

ヤマノイモは、自然からの恵みの食物であり、終戦後の自給自足の時代の大切な食糧の一つであった。

中学生に、なった頃より秋になると、叔父に連れられ、本宮山の五合目あたりより、谷底に向かい。ブッシュを下りてゆく。

背負子が枝に木立に、引つ掛りなかなか進めない、ようやく谷底に着き背負子より、道具を取り出す。

道具は、平地を掘るときと違い、金梃子と小型のツルハシと南京袋のみである。

平地の土の中にあるのとは違い、岩の碎けた間とか、大きな岩と岩の間とか、なにしろ掘るのではなく、岩を取り除き、その空間にあるヤマノイモの固りを取り出すのである。

なかには細い棒状の三十センチ余りのもの時には有るが、ほとんどが握ね状のヤマノイモであった。

掘るためには先ず、ヤマノイモの在り処を突き止めなければならぬ。黄葉が見える秋の始めなら、容易に見付けることが出来るが、霜が降りてしまうと、見付けるのも大変である。

○黄にとほる山芋の葉の時雨きてもろく落つるを見てしまひけり 山口茂吉

まだ黄葉が少しでも残っていればよいが、蔓も地に落ちてしまふ、短く切れ切れになり地に落ちてゐる、その切れ端の点を辿り辿つてヤマノイモの在り処を探し当てる。

霜の降りるのが早い、本宮山での山芋掘りは、あまり多くは掘れないが、それでも堀りに行くのは、土の中で、育つた自然薯と、香り、粘り、味が格段の違いがある。

○ふじがねの雪より白き山神の山のいもすりてつくりしとろろ 石樽千亦

ところろ汁を食べるまでには、時間がかかる、ヤマノイモは、岩場のなかで育つたため、あまり洗わなくてもよいが、搗鉢で搗るのが大変であり、粘りが強いいため、だし汁で適度に汁状にするのに時間が、かかってしまふ。

食べるまでの長さが、味にも加味される。

「氷魚」のことから (225) 岡本八千代

第101回全国高校野球選手権大会も22日に終わった。大阪の履正社高校が石川県の星稜高校を5-13で破って初優勝をしたのだった。私は今年も少女少女らのあの無邪気な熱血的な選手たちや応援する姿を見て不思議なほど美しい感動を覚えたのであった。その心で。

これから「氷魚」の稿を書くこととするに、島木赤彦の著した「歌道小見」(大正13年5月25日発行)の私の書き抜きしておいたものが出てきた。その本のP26に歌を作す第一義。

○「自己の歌をなすは、全心の集中から出ねばなりません。これは歌を作すの第一義でありまして、この一義を過つて出発したら、終生歌らしい歌を得ることは出来ません。」

○「歌の道は、決して面白おかしく歩むべきものではありません。：慎ましく寂しい一筋の道であります。」

また、その本のP28には「写生」について。

○「私どもの心は、多く、具体的事象との接觸によって感動を起します。」

感動の対象となつて心に触れ来る事象はその相触るる状態が、事象の姿である。」

○「予は萬葉集を以て、古来歌集中の最大權威として、之れを尊敬してゐるが、之を以て和歌の絶対理想なりと思つては居らぬ。絶対理想の歌乃至歌集などいうものが、現実存在し得るべきか如何かさえ分らぬもので

ある。従つて予は今まで萬葉集を以て絶対理想の歌集と言つたことはない筈である。」

また、P223には

○「小生(赤彦)等は、未だかつて、教育のために歌を作らず、子供のために歌を作らず従つて必ず小学生から読んでもらうという必要はない。」

そして、P85にもどつて。

○「現代人が歌を作すからは、その歌の上に現代人のもつ思想が現れて居るべきである。歌の領域は、個人のもつ思想感情を押し詰めて單純なる一点に澄み入る所に拓かれてあります。」

と、述べている。また、P30には、

○「生を写すということは、心と物と相接觸する状態を写すものとされて居ります。物心相触れた状態の核心を歌い現すのが、最も確に自己の主観を現す道と云うのであります、これを写生道と稱してゐるのであります。」

と。

今回は、島木赤彦の「歌道小見」の抜粋文で了つてしまつたけれど、アララギ派の主流になつてきた文章と思うので、掲載した。

大正三年に赤彦は「アララギ」の編集に携わり始め、主にその功績によつて「アララギ派」は歌壇の主流になつていたのであった。

そして斎藤茂吉へと受け継がれてきたのであった。そして今なお「アララギ派」の「写生」の歌は続けられてゆくのであろうか。

編集室だより【二〇一九年八月】

今泉 由利

○東京湾野鳥公園へ俳句の吟行。

野鳥公園がある場所は、浅い海だったそうだが、一九六〇年代に埋立てられ、自然に出来た池や草原に野鳥が集まるようになり、蘇った自然を、公園に仕立てた。

淡水池、淡水泥湿地、潮入りの池、前浜干潟。自然学習センター、ネイチャーセンター、自然観察のための設備が立派に整い、素晴らしい。

水辺の鳥達がやってくる。山野の鳥達もやってくる。干潟の生物の観察も容易であり、望遠鏡や、ガイドも受けられ、すべての命の天国と思えた。

大変暑い最中、秋の季語を入れなければならないという、とても気に入らない吟行だった。

○姉の法事で豊橋へゆく。姉が亡くなってしまってから、私自身が死んでしまったのと同じ気がして、自分が死んでしまっただけの世の中を見ているような、そんな気がして、今生きている。

○NYから「仕事」のためにやってきた玉由と由野と。編集室は一ヶ月半にわたる合宿所となる。

朝も昼も夜も、区別のないような仕事だから、朝も昼

も夜もない暮しになった。面白がって付き合っている。

○「サマソニック」のマリン・ステージ。マリン・スタジアムへ行く。

天井の無い野球場。夕刻、どんどん人々が集まってくる。球場の収容人数は、約三万人とは座席数。野球をするスペースにも、もう一人も入れない程の人々が埋まり、DJ・イーディエム・ダンス・ミュージック・ZEDDの作り出す、とてもない大音響に、球場中の人々が反応する。踊りながら、ライトをかざして。羽田空港へ、行き来の飛行機にも届いているだろう。私の身体も、しっかりリズムを受けとめて、とてもとても喜んだ。こんなにも沢山の人が、一つの音響になりきって：こんなことつてもう神々しい。

○アルゼンチン生まれ、NYに住んでいる子達に、日本人としてのルーツも知らなくてはいけない。

京都、高台寺の裏山の墓所。少し前、頼ねた時よりすっかり明るく広く整備され、「探す」ということが加わったけれど、菫翁貫名先生の墓。

○ジーンズとスニーカーで過ごす私達に、お茶屋さんへはNG。「困ったね」と言っているうちに「置屋さん」で「お茶屋さん」への身嗜みを整えていただき、晴れて「一力亭」の客となる。

野菜・まんだら (20) オリーブノキ *Olea europaea*



- モクセイ科オリーブ属
- 原産地：地中海沿岸域。
- ヨーロッパでは、紀元前3000年頃には栽培が始まっていた。
- 常緑高木。日本では、小豆島を中心に瀬戸内海の周辺で栽培される。
- 5月～6月に葉腋から花枝を伸ばし、黄白色の小花を咲かせる。
- 果実は楕円形。はじめは緑色、黄色から紫色になり、黒色になる。果実は、生では渋味、苦味があり、食せない。塩漬けに加工して食用にする。
- 緑色のオリーブは熟す前、黒色オリーブは、熟してから収穫する。
- 熟したオリーブを圧搾して、オリーブ油を採る。常温圧搾したバージンオイルがもっとも高品質で、抗酸化作用の成分を多く含む。
- 薬用では、緩下剤、塗布剤、基剤油、スキンクリームにも。
- 木部の樹脂は、気管支の吸入薬、香水など。
- 葉を乾燥させ、細く切り、スプーン1杯ほどマグカップに入れ、お湯を注ぐ。オリーブ茶。消化器、呼吸器、肌に。
- オリーブの葉には、ファイトケミカル、オレウロペイン（植物だけがもつ、色素、苦味、香り、えぐみ、辛み）、抗酸化作用があり、活性酸素をとり除き、ガン細胞を退治する。オレウロペインには、骨密度をあげ、骨が強くなる。
- アルゼンチンでの生活では夕刻、友人、家族…皆集まってきて、オリーブやチーズやエンダイブや…つまみに、今日の出来事など話しながら、お酒をいただくのだった。それから後、夕食になる。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (〇三) 五九二四・二〇六五

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

今泉由利 宛

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。